

〔研究ノート〕

北九州の万葉歌をめぐる

島 田 裕 子

要旨

万葉集の中には、北九州市の地名を詠んだ歌がある。関門海峡に位置した北九州は古代から交通の要衝であった。山陽道から九州の西海道を結ぶ結節点で、ここから九州の中心である大宰府政庁へと向かい、九州全土へ広がる。また、関門海峡を通過して九州に、あるいは朝鮮半島や大陸へと航海した。北九州の地名を詠んだ万葉歌は、新勝山公園、貴布祢神社、岡田宮などに歌碑が建てられ現在に至っている。万葉集の地名歌、今回は北九州地域を詠んだ歌に限定して考察する。

キーワード 万葉集 北九州万葉歌碑 古代の道 上代文学

はじめに

北九州地域を詠んだ万葉歌について、古代の道に着目し考察していく。また、大陸や朝鮮半島との国防のために東国から召集された防人についても書き添えていきたい。

(1) 北九州地域を詠んだ万葉歌及びその歌碑

(2) 豊前国・筑前国

(3) 古代の道

外交の最前線、九州を治める要、大宰府への道

(4) 地名の歌を詠むことの意味

(5) 遠い東国から来た防人のこと

(1) 北九州地域を詠んだ万葉歌及び歌碑

もともと北九州市は一九六三年に門司、小倉、戸畑、若松、八幡の五市が合併し政令都市となった新しい都市名である。九州では福岡市、熊本市、北九州市が政令都市であり、北九州市は県庁所在地ではない九州唯一の政令都市である。市は、九州最北端、関門海峡に面し、福岡県北部の海岸線から内奥部に入りこんでいる。北九州という名称は、元来九州の北部を指したり、現在の北九州市を中心に遠賀郡、中間市・行橋市、京都郡、豊前市を指し示す地名であった。しかし、拙稿では、現在の北九州市に限定してこの市の中にある地名を詠み込んだ歌を扱っていく。

北九州市には、この地域の地名を詠んだ万葉歌碑が十一あり、新勝山公園と貴布祢神社、夜宮公園、岡田宮に建てられている。

○小倉北区の【新勝山公園】の万葉歌碑

小倉北区内の市役所や小倉城の近くにある新勝山公園の万葉の庭には、六首の万葉歌が歌碑となっている。大きな自然石に西本願寺本や元暦校本等によった万葉仮名の万葉歌本文を刻みつけた本体と、それに寄り添うように少し小さな自然石に訓み下し文が掘り込んである。この大小の自然石が一对となり合計、六箇所万葉歌碑が建っている。1は『万葉集略解』より引いてある。他の歌も現存

する万葉集の古写本から引いてあり、美しい万葉仮名を楽しむことができる。但しここに挙げた訓み下し文は『新編日本古典文学全集 万葉集』（小学館刊）より引いた。また、新勝山公園以外の万葉歌碑も同じ古典全集本を引用した。

1 豊国の企救の浜辺の砂地の真直にしあらば何か嘆かむ

(7・一三九三 作者未詳)

万葉集略解

2 豊国の企救の浜松ねもころになにしか妹に相言ひそめけむ

(12・三三三〇 柿本人麻呂歌集歌)

元暦校本

3 豊国の企救の長浜行き暮らし日の暮れ行けば妹をしぞ思ふ

(12・三三一九 作者未詳)

京都大学本

4 豊国の企救の高浜高々に君待つ夜らはさ夜更けにけり

(12・三三二〇 作者未詳)

西本願寺本

5 豊国の企救の池なる菱の末を摘むとや妹がみ袖濡れけむ

(16・三八七六 豊前国の白水郎)

尼崎本

6 ほととぎす飛幡の浦にしく波のしばしば君を見むよしもがも

(12・三一六五 作者未詳)

○小倉北区長浜町の【貴布祢神社】の万葉歌碑

7 豊国の企救の長浜行き暮らし日の暮れ行けば妹をしぞ思ふ

(12・三二一九作者未詳)

* 新勝山公園の3の歌に同じ。

○戸畑区夜宮の【夜宮公園】の万葉歌碑

8 ほととぎす飛幡の浦にしく波のしばしば君を見むよしもがも

(12・三一六五 作者未詳)

* 新勝山公園の6に同じ。

○八幡西区岡田町の【岡田宮】の万葉歌碑

9 大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

(3・三〇四 柿本人麻呂)

この歌は「柿本朝臣人麻呂が筑紫国に下る時に、海路にして作る歌」と題詞にある歌で、「島戸」は島と陸地との間の瀬戸の意、島戸の位置は不明だが岡の水門（みなと）とも取れる。筑前芦屋町の嶋戸駅も可能性もあるが、海路ではなく陸路なので除く。柿本人麻呂作歌である。新勝山公園の2歌「豊国の企救の浜松ねもころに……」も柿本人麻呂歌集歌であるので、柿本人麻呂がこの北九州を通過して大宰府へと向かった可能性は高い。

10 天霧らひ日方吹くらし水茎の岡の水門に波立ち渡る

(7・一二三二一 作者未詳)

11 ほととぎす飛幡の浦にしく波のしばしば君を見むよしもがも

(12・三一六五 作者未詳)

* 新勝山公園の6に同じ。

ここで詠まれている万葉歌は、企救（きく）の浜、企救の浜松、企救の長浜、企救の池、飛幡（とばた）の浦、岡の水門（みなと）と地名が詠み込まれた歌である。それに加えて題詞と歌から、岡の水門か、と読み取れる9の歌が加わる。この柿本人麻呂作歌3・三〇四は、神武天皇の東征を偲ばせる「島戸を見れば神代し思ほゆ」という下句によって、「島戸」が岡の水門であると推測できるものだが、確定はできない。岡の水門は遠賀郡芦屋町に位置する遠賀川の河口をいう。古代は大きな船が入っても十分な港だったらしい。洞海湾から遠賀川を通過して岡の水門に至る内陸水路があり、現在の遠賀郡・北九州市若松区・戸畑区・八幡東区・八幡西区・中間市などの地域に面している。また岡田宮は、神武東征時（神武）天皇、筑紫の岡田宮に一年坐しき」と古事記にある宮と推定される。

(2) 古代の豊前国・筑前国

北九州市は、古代では豊前国と筑前国の一部にあたる。

古代の豊前国と筑前国には、その名の由来として『豊後風土記』

『逸文筑後風土記』に左記のような記載がある。

豊前国は、

(景行) 天皇、ここに歡喜びたまひ、すなはち、菟名手に勅云りたまひしく、「天の瑞物、地の豊草なり。汝が治むる国は豊国と謂ふべし」とのりたまふ。重ねて姓を賜ひ豊国の直と曰ひき。因りて豊国と曰ふ。後、二つの国に分ちて、豊後の国を以て名と為せり。

『豊後風土記』

ここで豊草は里芋のこと。北より飛来した白鳥が餅になり、芋草数千許株となって花と葉は冬も栄えたという伝承に続く話が、右に引用した箇所である。食物の豊かに縁る国であった。

また、筑紫国の名の由来については、

(一) 二つに公望案るに、筑後の国の風土記に云ふ)

築後の国は、もと筑前の国と合せて一つの国にありき。昔、この両の国の中の山に峻しき狭き坂あり。往来の人の駕れる鞍、鞍摩らえて尽きき。土人、鞍鞞尽の坂と曰ふ。

(三) 三つに云ふ(昔、この境の上に麁猛ぶる神ありて、往来の人

半ば生き、半ばは死せにき。その数極多なり。因りて人命尽の神と曰ふ。時に筑紫の君・肥の君ら占ふるに、筑紫の君らが祖なる甕依姫して祝祭らしめき。こゆ以降、路行く人、神に害はるることなし。こを以て筑紫の神と曰ふ。

(四) 二云ふ) その死れる者を葬らむとして、この山の木を伐り棺興を造作りき。これに因り山の木を尽さむとしき。因りて筑紫の国と曰ふ。

後に、両の国に分ち、前と後とせり。

『逸文筑後風土記』

とあり、筑紫の国名の由来について数案を挙げる。一は散逸している。二は、険しく狭い坂があって行き来の人が乗る馬の鞍に敷く布が擦りきれたことで、したくら尽しの坂といい、三は、この坂の上にあらぶる神が坐してこを往来する旅人の半分は死んだという。その数はたいへん多かった。それでいのち尽しの神と呼んだ。筑紫の君らの祖、甕依姫を巫女として祭らせたところ、路行く人を襲うことがなくなった。これによって筑紫の神と言われ、筑紫の地名の由来を説く。さらに四では山で死んだ者を葬る棺を山の木を切ったが、山の木が尽きようとしたので、これによって筑紫の国と呼ぶとある。

ここで筑紫の三前(豊前・筑前・肥前)の国を、豊前(とよくにのみちのくち)などと読むのは皆『和名類聚抄』による訓である。

豊前は現在の北九州・行橋・豊前・田川の各市と、京都・築上・田川の各郡および大分北西部の宇佐・下毛の二郡の地域をいう。『延喜式』には

豊前国上〈管 田河 企救 京都 仲津 築城 上毛 下毛 宇

佐〉 (『延喜式』民部省上)

筑前国上〈管 怡土 志麻 早良 那珂 席田 糟屋 宗像 遠

賀 鞍手 嘉麻 穂浪 夜須 下坐 上坐 御笠〉

(『延喜式』民部省上)

とある。

(3) 古代の道

豊前国・筑前国は本州と九州を結ぶ要衝である。特に北九州地域は関門海峡に接し、古代中央集権国家の統治には重要な地域であった。古代日本の交通網(八〜九世紀)は、大和朝廷が中央集権国家へと国づくりを進める中で整備されていった。

特に六四五年の大化の改新によって中央集権国家確立への基礎作りが急務となった。大宝律令の制定や、その後の養老律令の制定などの中国に倣った法令の編纂と実施によって律令国家の確立をはかった。また中央政府の統治が国の隅々まで行き渡るように、交通路も体系的に整えられていく。

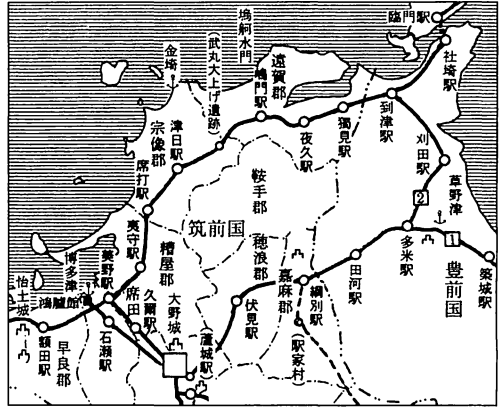
北九州の万葉歌をめぐって

その二に曰はく、初めて京師を修め、畿内国の司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、及び鈴契を造り山河を定めよ。(『日本書紀』孝徳天皇 大化二年正月)

右の「大化改新詔」にあるように、中央政府から地方への政令伝達、地方から中央政府への報告など、文書による通信連絡、国司等の地方官の赴任・帰任・年次報告等の制度を停滞なく行うための往来に必要な交通路と施設の、即ち官道に駅伝制の整備等がなされた。

陸路は、「北陸道・東海道・東山道・畿内・山陰道・山陽道・南海道・西海道」の八つの大路の整備がなされ、大路を核に中・小路がはりめぐらされた。木下良氏の「古代の道と駅の調査法」によれば、駅路(官道)などの古代の道路は直線的路線をとって計画的に設けられていた。平地では両側溝を供え、道路幅は10メートル前後の大道であったことが各地の発掘調査で判明した。

西海道は、九州全土をめぐる大路を言う。大宰府政庁から古代道路(駅路)が九州内に放射線状に伸びていた。『延喜式』「駅伝馬条」には、西海道諸国はいずれも大宰府までの日数を記してあり、これは、奈良の都と同じように、大宰府を中心に交通路が整備されている証である。九州の大路、西海道は、大宰府から大分・宮崎を經由して鹿児島に至る東回りを〈西海道東路〉、大宰府から、熊本を經由して鹿児島に至る西回りを〈西海道西路〉という。また、



『事典 日本古代の道と駅』を参考に作成。
□は太宰府。

「延喜式」駅伝馬条」に見る西海道の駅路の特色として、官道の駅家に伝馬が置かれる例が多い。^(注)

ここで現在の鹿児島本線に重なっていく、下関から門司、博多經由の道の駅家について見て行こう。山陽道の南端、臨門駅から西海道の社崎（福岡県北九州市門司区）まで海峡を船で渡る。

臨門駅（山口県下関市長府あるいは唐戸、前田）― 社崎（旧門司）― 到津駅（小倉城辺）― 獨見駅*馬の頭数15疋（八幡西区紅梅）― 夜久駅*15疋（八幡西区永犬丸）― 嶋門駅*23疋（芦屋町芦屋）― 津日駅*22疋（福津市畦町）― 嶋門駅*15疋（古賀市青柳）― 夷守駅*15疋（粕谷市内橋）― 美野駅*15疋（博多駅中央街）― 久爾駅*10疋（博多区板付）など。そ

して大宰府に着く。^(注)

北九州市を詠む万葉歌はこの大路に沿って詠まれる。〈企救の浜〉は、穴門^{あなと}あるいは穴戸の海峡（関門海峡）を渡って社崎駅から到津駅までの長い海岸線であり、〈飛幡〉は現在の戸畑のことで洞海湾に位置する港である。古代の洞海湾は細長い川状の湾で遠賀川と水路でつながっていた。響灘が風波が強いため、船はそれを避けて洞海湾から水路で遠賀川の河口の岡の水門へ出ることが多かった。日本書紀神武天皇即位前紀、神武東征の初期に「天皇、筑紫国の岡水門^{みなと}に至りたまふ」という記載がある。また、同じく日本書紀仲哀天皇二年に、天皇は、穴門（長門）の豊浦宮^{ゆのうら}から船で進まれ「岡浦に入れたてまつる。水門に到るに進むこと得ず……天皇、即ち禱^{いのち}祈^{いのち}みたまひて挾抄者倭国の菟田の人伊賀彦を以ちて、祝として祭らしめたまふ。則ち船進むこと得たり」と水門のことが記され、「（神功）皇后、別船にめして、洞海^{くまうみ}より入りたまふに潮涸^{ほほ}て進むことを得ず……潮の満つるに及びて、即ち岡の津に泊りたまふ」と岡の水門にこのことが記される。岡の水門は遠賀郡芦屋に位置する。神武東征や神功皇后の熊襲征討・新羅征討の伝承は、この航路を通じたことを記す。

(4) 地名の歌を詠むことと目的

北九州の地名歌が古代の陸路及び航路の要衝に残っていることは何を意味するのだろうか。改めて歌を見てみよう。

ほととぎす飛幡とばたの浦にしく波のしばしば君を見むよしもがも

(12・三二六五 作者未詳)

12・三二六五歌は万葉集の卷十二という古今相聞往来歌類の下巻に収められた歌であり、「羈旅に思を発す歌」と羈旅の部立の歌群の一首である。この歌には同じく卷十一の古今相聞往来歌類の上巻の問答歌のなかに類歌がある。

住吉の岸の浦廻にしく波のしばしば妹を見むよしもがも

(11・二七三五 作者未詳)

住吉の津、住吉大社のある住吉の歌とは三句から五句までほぼ同じである。港の地名だけが違う。11・二七三五の住吉は摂津の住吉で、住吉大社は現在の大阪市住吉区住吉にある。住吉神(すみのえのかみ)三神と神功皇后を祀る。伊弉諾尊が禊払いをしたときに生まれた表筒男命(うわづつのおのみこと)中筒男命(なかづつの

おのみこと)底筒男命(そこづつのおのみこと)の三神を住吉神と称する。住吉神は、航海の神、歌の神とされる。この地に神功皇后が住吉大神を鎮斎されたのを社のはじめとすると伝えられる。また、住吉津は難波津とともに古代大和朝廷にとって重要な港で、畿内から中国地方、四国、九州、そして朝鮮半島、大陸へ向かう航路の拠点の港であり、住吉神社は航海の安全を祈願する重要な神社であった。(住吉)

このことから、住吉の歌を元歌に、飛幡の歌が倣って詠まれたと考えるのが妥当であろう。旅人の無事を祈って海の神に捧げられた歌と考えるのは、住吉神社に関わる歌であるからだ。地名歌がすべてこのような目的で詠まれているわけではないが、地名歌の詠まれたことの一つとして、旅の安全を願うという目的もあったと考えられよう。

企救を詠んだ歌にも類歌がある。

豊国とよくにの企救ききうの高浜高々に君待つ夜らはさ夜更けにけり

(12・三二二〇 作者未詳)

石上布留いそのかみふるの高橋高々に妹が待つらむ夜そふけにける

(12・二九九七 作者未詳)

三二二〇歌は卷十二の悲別歌に属し、二九九七歌は正述心緒歌の

部立にある。

企救の浜は北九州市門司区の大里から小倉へ続く長い浜を指すと
も、赤坂から小倉、戸畑のあたりとも言われ、いまの北九州市の小
倉区を中心とした付近の海岸線のことを示す^(注10)。現在は長い浜の跡形
もなく埋め立てられて倉庫群や海岸道路が続くが、古代には駅路の
道行く旅人だけでなく、流れの速い穴門（関門海峡）を無事に通り
抜けた船人の心もなぐさめたことであろう。長浜町の貴布祢神社に
は12・三二一九の歌碑がある。

豊国の企救の長浜行き暮らし日の暮れ行けば妹をしぞ思ふ

(12・三二一九作者未詳)

もともとは紫川の東岸名衛屋岬にあった貴布祢神社は、大宰府か
ら都へ向かう旅人や海路を航く船を見守る神社である。

12・三二二〇の歌は、二九九七の歌と地名のみが違いあとは類
似している。類似、類同性は広く民に親しまれ共感される特質を有
する。また12・三二一九の歌のゆったりとした調べは、離れ居る
妻や恋人のこと、故郷のことを思う旅人の心を詠み、旅の辛さを慰
める望郷の歌になっている。家持も

越の海の信濃の浜を^レ行き暮らし長き春日も忘れて思へや

(17・四〇二〇)

と越の長い春日を都に残してきた妻をひがな一日恋慕う歌を、1
2・三二一九の歌を模して詠んでいる。このような類同は広く人々
の心に共感をよぶ汎用性の高い伝誦歌の色合いが濃い。また、企救
の長浜を詠んだ歌はすべてが相聞の歌であり、旅のかりそめの恋
や、離れ居る妻や恋人をしのお望郷の思い深い羈旅歌の特色を有し
ており、旅の無事を祈り地霊鎮魂の魂振りの歌になったとも考えら
れる。

但し、北九州の地名歌の多くが巻十二の作者未詳歌であることか
ら、巻十二の編集の傾向や内実を詳しく見ていく作業が必要であ
る。

(5) 防人のこと

飛鳥・奈良時代は国際化の時代であり、東アジアの動向は激しく
揺れていた。七世紀には隋が亡び唐が台頭して高句麗へ出兵した。
高句麗・新羅・百済の三国で拮抗を危うく保っていた朝鮮半島の情勢
が動いた。任那を領有していた大和朝廷は百済と親しい関係をもつ
ていた。北九州は大陸や朝鮮半島に対する国防の地でもあった。防
人の制度は先に記した大化二年正月の詔（『日本書紀』孝徳天皇二
年）に定められた。また、「是の歳に、対馬島、^{つしま}、^{いさのみしま}、^{いさのみしま}、筑紫国等

に、防と烽とを置く。又、筑紫に大堤を築き水を貯へ、名けて水城と曰く」(『日本書紀』天智三年)とあるように、大和朝廷は、対唐・新羅との戦いに備えていた。唐・新羅の連合軍と戦う百済救済のために大和朝廷は出兵した。その兵は約三万人。百済・大和軍が六六三年(天智二年)、朝鮮半島の白村江で大敗する。このために九州だけでなく大和朝廷が統治する全土から兵が集められ、特に東国の兵は強いと言うので防人として召集された。白村江の大敗以後、唐・新羅に対する防衛として天智三年の詔が出された。防人には命をかけた辛い労役でしかなかった。『日本霊異記』の中巻第三には以下のような仏教説話がある。「悪逆の子、妻を愛し、母を殺さむと謀り、現に悪死を被る縁」に、武威の国多麻の郡の里人、吉志大麻呂は防人に徴されて三年務めることとなった。妻は家を守り国に留まり母は子に随って行った。しかし大麻呂は妻と離れて暮らすことに耐えがたく母を殺して喪に服し、役を免れて妻とともに居ようと思った。しかし大麻呂の策略に大地が裂けて自ら落ちてしまう。母は何とか子を救おうとしたが出来なかった。子を慈しみ善良で信心深い母を称賛し悪逆は必ず報いを受けるという結末で話は終わる。『日本霊異記』は勧善懲悪の誇張した説話が多いが、ここで着目したのは防人という役が東国の人々にはいかに負担で辛いものであったかを物語っていることである。

防人歌にも

北九州の万葉歌をめぐって

天地の神を祈りてさつ矢貫き筑紫の島をさして行くわれは

(20・四三七四 下野国火長大田部荒耳)

という勇ましい言挙げの歌もあるが

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

(20・四三二二 遠江国主帳丁鹿玉郡若倭部身麻呂)

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさもの思ひもせず

(20・四四二五 昔年防人歌)

という歌もある。防人に行くことは、戦いで死傷することも多く、三年で無事に帰ってくる保証は何もなかった。三年で帰郷するにも国からの物資の手当ても不十分でそのまま九州北部地域に留まった人々も多かった。^(注1)防人の歌で北九州を詠んだものはない。しかし、企救の浜を詠んだ相聞歌を歌いつつ故郷の妻を懐かしむ東国の人々もいたであろう。

まとめ

北九州市の万葉歌というテーマで市民カレッジで講義をしたのが、本稿をまとめてみようと思っただけだった。北九州市を詠んだ万葉歌は少ない。畿内の万葉歌、大宰府歌壇での万葉歌等とく

らべるとなるとも乏しい。二〇一四年春、上代文学会で平川南氏が「甲斐酒折る宮の謎を解く」という講演をされた。氏が着目された古代の交通路という視点を加えると、北九州の数少ない歌がすべて、西海道の官道に沿った地名歌であることが判明した。

畿内から山陽・山陰を通過して或は航路で瀬戸内海から九州へ渡る海峡、穴門の海峡（関門海峡）は交通の要衝で、古代から神武天皇、仲哀天皇、神功皇后等が穴門に滞在され、そこから畿内へと向かい或いは九州へと進んだ。海に隔てられた九州の地に広がる官道西海道の事実上の起点、北九州の歌は、この地へ下った国司たちの往来、租庸調の運搬、防人の移動など人々が行き交った証である。相聞歌が多いのも、羈旅の歌であるからだ。そして旅の無事を地霊神に言祝ぎささげた歌も伝承として残っていたのであろう。八首ほどの歌に古代の人々の旅の有り様がしのばれた。また今回は北九州市に限定したが、さらに北部九州地域の万葉歌に広げて考察していきたい。

『万葉集』、『風土記』、『日本書紀』本文は『新編日本古典文学全集』に拠り、適宜改めた。『延喜式』は、虎尾俊哉編『延喜式』（訳注日本史料）集英社二〇〇七年により引用した。

注

1 逸文風土記は、原本が散逸してしまい元の形は伝わっていない文献である。しかし他の本に引用されることによって、その散逸部分が復元できるものを逸文風土記と言う。九州の逸文風土記は複雑で、二種類の性格が異なる風土記編纂された。甲類・乙類と分けているが、ここに引用したのは甲類の風土記である。

2 『事典 日本古代の道と駅』木下良 吉川弘文館 2009年

3 木下良 同右

4 『古代日本の交通路Ⅳ』藤岡謙二郎編 大明堂 1978年

5 『古代日本の交通路Ⅲ』藤岡謙二郎編 大明堂 1978年。臨門駅には諸説ある。『古代日本の交通路Ⅲ』で、「周防国」を担当した水

岡義一氏は、外浦、前田、唐戸町、赤間が関を挙げられているが、朝鮮式山城であったとされる長門城を現在の火の山とし、その近くの前田を臨門とする。

6 『事典 日本古代の道と駅』木下良

7 穴門豊浦宮は下関市長府の宮の町忌宮神社か。旧版岩波古典大系日本書紀仲哀天皇二年七月の頭注に下関市豊浦村の忌宮神社の地に伝豊浦宮址があると記す。

8 『逸文撰津国風土記』、『風土記』新編日本古典文学全集 小学館

9 住吉大社ホームページ

10 『九州の万葉』福田良輔編 中原勇夫・瀬古確・春日和夫・鶴久 桜楓社 1974年

11 『続日本紀』天平神護二年四月七日に、東国の防人が、防人制廃止後も筑紫に留まっているので、まずはそれらを召集し守備に配置するようにという勅が記されている。強制的に召集されるが、東国への帰郷させる対策が疎かで残留せざるを得なかったことを示す。

参考文献

- 『万葉の旅1九州』中西進企画 林田正男著 保育社
『ふくおか文学散歩』轟良子 轟次雄 西日本新聞社
『祭式の中の古代文学』工藤隆 桜桃社
『事典 日本古代の道と駅』木下良 吉川弘文館
『日本古代史事典』江上波夫・上田正昭・佐伯有清 大和書房
復刻版『国号考』内山眞龍 五月書房
『万葉集筑紫歌群の研究』林田正男 桜楓社